

# 英ポルトガル同盟関係の研究

四国大学短期大学部

ビジネス・コミュニケーション科

蔵谷哲也

## 1. はじめに

英ポルトガル同盟は 14 世紀に遡る世界最長の同盟である。イングランドの十字軍がリスボンをムーア人から取り戻す援助をすることから始まり、英国人がポートワインの味を覚えることまで、英ポルトガル関係は両国の歴史と独自性の枠組みを増強してきた。1943 年 10 月、庶民院での演説でウィンストン・チャーチルは、英ポルトガル間の古くからの友好関係を世界史上比類なき同盟であると周知の通り特徴付けた。<sup>1</sup> しかしながら、最近に至ってはこの同盟は既に過去のものになってしまったようでもある。

アフリカ独立運動の父クワメ・エンクルマ (Kwame Nkrumah) は、「植民地開拓者であり植民地化されている」というポルトガルの二重条件を認識していた。政治的独立を付随した金融と外交の依存の形態が、独立した主権国家体制であるが、実際は 200 年以上の間、英保護領であるポルトガルによって提示されるという。<sup>2</sup>

ロンドンにおいて、ピカデリーは、世界的に有名なサーカスに通じる最も活気のある幹線道路の一つであるが、かつてはポルトガル通りと名付けられたことを、英国人やポルトガル語を話す人々を含めたロンドンへの数百万人の訪問者も知らないという。

このことは、ポルトガル王ジョアン 4 世とその妻王妃ルイサ・フランシスカ・デ・グスマン (Luisa de Guzmán) の娘キャサリン・オブ・ブラガンザ (Catarina de Braganza)<sup>3</sup> が 1661 年、イングランドのチャールズ 2 世との結婚を祝賀するものであった。これはポルトガルがスペインから独立を回復して 20 年経過してからのことである。この独立で、スペインとの長期に亘る (ポルトガル王政復古戦争) が始まり、ポルトガルの状況は不安定になった。フランスとの同盟関係は無力化し、ポルトガルの独立を維持することは危険なことであった。そこでジョアン 4 世が目をつけたのが、この婚姻を通しての、イングランドとの同盟関係の樹立であった。

英ポルトガル関係は、利益共同体である英葡同盟と呼ばれることもあり、この同盟は、1147 年のイングランドの十字軍が、アフォンソ 1 世のモスLEMからリスボンを奪回するレコンキスタに参加したことに予示されたと言われている。その後、2 か国間ではいくつかの条約が締結され、通商のみならず外交の面で 2 か国間関係に様々な影響を与えてきた。2 か国間では、諸条約やその他の様々な要因によって、商人や職人の国際移動が起こり、貿易のパターンや産業構造に影響を与えてきた。本稿の目的はいかにこの同盟関係が 2 か国間に

形成され、そして1703年のメシュエン条約に至ったか、その変遷を探ってみることである。特に以下の4つの点を考察したい。1. 十字軍勢力が英ポルトガル関係にいかに関与を及ぼしたか。2. イングランドとポルトガル間のいくつかの条約の役割 3. 1654年英ポルトガル条約について。4. メシュエン条約(1703年)である。

## 2. イングランド十字軍とポルトガル

7世紀、カリフであるウマル(Umar)によってエルサレムが乗っ取られた。最初、巡礼は禁じられなかったが、11世紀初頭、ファティマ朝カリフのハキム(Hakim)がクリスチャンを迫害し始め、復活の教会(Holy Sepulcher)を強奪した。ハキムの死後(1021)、迫害は減少したが、イスラームとクリスチャンの関係は緊張したままであった。そして、エルサレムが比較的寛容なエジプト人から、マンズイケルト(Manzikert)でロマノス4世ディオゲネス(Romanus IV)を打ち破ったセルジュークトルコ(Seljuk Turks)に、1071年、手渡された時、緊張は非常に高まった。<sup>4</sup> イスラームから聖地を回復するための、11~14世紀の間に、欧州のキリスト教徒によって企てられた一連の戦争が十字軍と考えられる。

8世紀初頭、アラブ人がスペインを占領した時、彼らはのちのポルトガル王国全体も占領した。そして、300年以上そこを保持した。彼らと同盟のベルベル人はポルトガル全体に大量に入植した。増加し、繁殖した。そして彼らの歴史における激しい出来事にもかかわらず、農業と商業を高度に発展させた。人口におけるアラブ人とベルベル人の要素はかなり確実に大きいものであったが、ポルトガルのかなりの数の本来の居住者がイスラームという宗教を受け入れ、イスラーム教徒と、(宗教が異なる人たちの間で)結婚した。スペインとポルトガルにおけるムーア人について語る時、混合群(mixed population)について語っている。宗教はイスラームであるが、アラブ語と合わせて、そしておそらくアラブ語以上に、ガルシア・ロマンス原語を使う人々である。結果として、ムーア人とモザラベはかつての宗教に固執していたが、都市や地方での社会経済生活に完全に参加した。そしてムーア人の文化生活にもある程度参加した。<sup>5</sup>

十字軍の定義の解釈は年代によって変化してきた。中世の思想家は、地上における神の代理人である法皇(the Holy Pontiff)の尽力を通して、節理の御手によって命じられた聖なる義のための聖戦と見なしていた。ここで、中世においては、歴史の撰理的観点が支配的であることが感じられる。十字軍のもう一つの中世的解釈とは、罪の赦しのために、海を越えて、聖地に導かれる巡礼のことである。<sup>6</sup>

1095年11月27日、クレルモン教会会議においてウルバヌス2世(ローマ教皇)は第一回の十字軍について宣言した。このウルバヌスの十字軍を宣言する演説または説教は5つの主要な版がある。そのうちの一つがシャルトルのフルシェール(Foucher de Chartres)によるものである。<sup>7</sup> Atiyaによると、十字軍のウルバヌス自身の定義が提示されている。十字軍全体の運動の勅許状を構成する。その命題の提唱における、教皇の思想の論理的順序は傑出しているという。ウルバヌス自身がフランス人であるから、フランス人の聴衆に向か

って、ラテン語ではなく、説教の厳肅さにおいて誰一人、疑いをもたせないようにするためにフランス語で演説をした。彼はフランス人たちに対して、聖地をサラセン人の手から奪回しようと呼びかけ、「乳と蜜の流れる土地カナン」という聖書由来の表現を引用して軍隊の派遣を訴えた。彼がフランス人に神のために武器をとるようにと呼びかけると、オヴェルニュ<sup>8</sup>にあるクレルモン＝フェラン(Clermont-Ferrand)<sup>9</sup>の人々は「神の御心のままに!」(Dieu le veult!)と答えたという。その内容は以下の様に要約できる。

1. 演説の序言において、西欧における道徳的状態内の内的改革を説教することから開始した。教皇は、人類の中における慎重さ、摂理、慎み深さ、平安、学習、用心深さ、敬虔さ、公正、公平、そして、純潔を十字軍の準備行為として、促した。

2. そして東部における共同行為の予備的手段として、西部における全ての人々の間での親睦を高めるために、教皇は「神の平和」を再び制定した。これは破門の刑に処すという条件で、毎週の水曜の晩課から月曜の夜明けまで、キリスト者の間での平和の侵害を禁止するものである。

3. 東方の状況に関する説明をした。異教徒の抑圧のくびきから、聖地と合わせてこれらの地域を解放し、これ以上の嘆かわしいことがない運命を持つ東方におけるキリスト教徒を防衛するために、西方のキリスト教国側の行動を必要とした。ヘレスポンド海峡(Bras de Saint Georges)に至るまでのルーマニアの地(ビザンチン帝国)におけるアラブ人とトルコ人を征服すること

4. 続く印象深い言葉の中で、「この理由により、私というよりは、主が、キリストの使者として、あなた方に懇願します。このことを至る所で公表し、そして、あらゆる階層の人々、歩兵や騎士、貧しい者、豊かな者 ここにいる人たちに申し上げる。こうしたキリスト教徒たちに、速やかに援助を運び込み、あなたの兄弟の土地からその卑劣な民族を破壊するように。ここには不在の人々にそれを宣言する。その上、キリストがそれを命じる。」

5. 十字架を負う、それらすべての人々の報酬は即座の罪の赦しである。私が授けられている神の権威を通して、私は出かけるすべての者にこれを与える。

6. 教皇は全ての王子のいつもの地域的な抗争を終焉させ、かれらの交戦状態を東部に移転させることを全ての王子に訴えた。

7. 結論として、教皇は、即座に開始することを、会衆に懇願する。全ての十字架を担ぐ人たちに先延ばしすることを控えること、彼らの土地を賃貸し、彼らの支出に必要な資金を集めることを強く勧める。そして、冬が終わり、春が来るや否や、彼らの指導者である神と共に、彼らに熱意を持って旅を始めさせよ。

この軍隊への招集は、この運動の普遍性を説明している。全イスラム勢力に対する西洋キリスト教国の中世の「連合軍」の闘いと定義できるだろう。争いの種はエルサレムであり、約束の地である。そこを東と西の両方の諸国が、保有する権利争いをした。

十字軍は、両側の信仰と原理の闘いとして開始された。言葉の血統が行動に変化した。以上が、十字軍進撃の発端といえる出来事であった。

イングランドとポルトガル間の友好関係は、独立した王国としてのポルトガルの歴史の初めに遡る。12世紀におけるイングランドの十字軍勢力と、聖地に向かう船舶の停泊所としてのポルトガルの便利な位置を通して、イングランドの従者たちは初期のポルトガル諸王のムーア人との長期間に亘る争いに対する、折にふれる大きな援助であることが生じた。

アルフォンソ1世は外国人十字軍を敵であるイスラムに対抗するため、雇用することを初めて試してみたが、失敗に終わった。1140年頃、60又は70隻の船隊がノルマン系英国人(Anglo-Norman)とその他の人々と一緒に聖地に向かっていて、リスボンに攻撃を加える助けをするように説得された。この包囲軍は、ポルトガル側の軍勢の怠慢さによって明らかに気力を失わされた。そしてこの失敗の記憶は次の攻撃のちょうど開始時において、ほとんど軽率なものとさせた。

別の機会において、イングランド十字軍の一団はアルフォンソ1世(Alfonso Henriques, the first King of Portugal、ポルトガル王)がリスボンの都市を奪回するのを助けた。そしてアルフォンソ1世は、ムーア人が追放された時にそこに設立された管区の最初の司教にイギリス人を任命した。そしてそれから、イングランド、フランダース、ゲルマンなどの様々な国籍の兵士を運ぶ164隻の船の遠征隊はパレスチナに向かう途中であり、ドーロ川に入った。その遠征隊のリーダー達は、ポルト(Oporto)の僧侶によって説得され、アルフォンソ1世のリスボンをムーア人から奪回する試みを援助するために、テージョ川を進んでいった。四カ月間の包囲攻撃によってリスボンは攻略された。そこで、十字軍兵士の一部はそこにとどまり、残りの者達は、聖地に行く道を進んだ。十字軍のイングランド僧侶であったギルバート(Gilbert of Hastings)は選ばれて、最初のリスボンにおける僧侶となった。そして同年、アルフォンソ1世は、ギルバートを、ポルトガルで軍役につかせる軍勢を招集させるため(すなわち、新たな十字軍遠征に加わり、シルベスを攻撃するための兵士を募集するために)にイングランドに送還させた<sup>10</sup>

1187年10月2日に十字軍国家エルサレム王国が、サラフッディーン(Sultan Saladin)を中心としたムスリム勢力によって奪回されたので、ローマ教皇グレゴリオス8世(Pope Gregory VIII)が10月29日、第三回十字軍を呼び掛けた。<sup>11</sup>しかし、同年12月に亡くなった。後継者であるクレメンス3世(ローマ教皇)は1188年、ムスリム勢力に対して戦端を開くスペイン人クリスチャンは、エルサレムに向かう十字軍に提供される罪の許しを得ることを保証した。1189年、サンシュ1世(ポルトガル王)のアルガルヴェの王国の首都シルヴェス(ポルトガルの南部アルガルヴェ地方の都市)攻略に、欧州北部(イングランド、フランス、ドイツ)の人々から成る第3回十字軍が手助けした。<sup>12</sup>サンシュ1世は40隻のガレー船、ガリオット、その他の船を十字軍の船隊に寄贈した。<sup>13</sup>1189年春、聖地への旅を継続する前に、デンマークとフリースラント(Frisia)からの十字軍の艦隊がリスボンに停泊した。そしてそこで、そこで多くのポルトガル人が合流し、サン・ヴィセンテ岬 Cape Sao Vicente 周辺を巡航し、ポルトガルの最南端であるアルガルヴェ

のアルヴォル (Alvor) の砦を攻撃した。そこで約 6 千人の大虐殺が行われた。イングランド、フランス、ドイツからの十字軍兵士を載せた 37 隻の大型船の 2 番目の艦隊が 7 月にリスボンに到着し、サンシュ 1 世のシルヴェス統合攻撃の提案を受諾した。その提案とは、シルヴェスから略奪できる金銀の全ては彼らのものであることの約束であった。サンシュ 1 世は南方に向かって陸地を進軍し、十字軍の艦隊は南方に向かって海路を行き、シルヴェスの周辺を掌握し、包囲攻撃を確立した。飢餓から、9 月 1 日の降伏に追い込まれた。サンシュ 1 世はムスリムが移動可能な財を持って離脱することを許すことに合意したが、十字軍はそれに反対し、シルヴェスを略奪しないなら、与えられる 1 万マラベーディ金貨の提供を拒否した。<sup>14</sup> 結局のところ、十字軍はしたい放題で、9 月 3 日、そこを略奪した後で、3 日後、聖地詣でを再開した<sup>15</sup>

翌年、カリフはシルヴェスを奪回しようと試みたが、失敗し、サンシュ 1 世とイングランドの十字軍団によって防衛されているサンタレン (Santarém) を包囲するため、北上した。いったん撤退したが、1191 年戻ってきて、シルヴェスのみならず、アルカセル・ド・サル (Alcácer do Sal) マルメラ (Palmela) そして、アルマダ (Almada) の攻略に成功した。このようにして、アレンテージョ (Alentejo) 地方におけるポルトガルの侵攻はエヴォラ (Évora) を除いて一掃された。<sup>16</sup> 結局のところ、十字軍の介入の唯一の永久的な結果とは、リスボンを征服したことであった。このリスボン攻略はポルトガル王国創立のおそらく決定的な出来事であったろう。この征服の後、ポルトガルに残り、土地や免責を与えられた十字軍兵士の中には多くのノルマン系英国人がいた。このことはポルトガルの書類の中に彼らの多くの名前が保存されていることから分かる。アルフォンソと合意した条件の中の貿易の自由を十字軍兵士達は重視したので、一つの結果とは、ポルトガルと他の北部の国々と同様に、ポルトガルとイングランド間の通商関係を開始させたことであろうという説がある。<sup>17</sup>

1199 年、ジョンはイングランド王 (King John of England) として戴冠した。アルフォンソ 8 世のみならず、ポルトガル王もこの戴冠式に大使を派遣した。この年、サンシュ 1 世の娘の一人に求婚したが、その求婚は拒否された。しかし、この年のイングランドの公式文書では、ポルトガル王はイングランド王のかけがえのない兄弟であり、友であるように示されていた。そしてサンシュ 1 世の息子の一人フェラン (Ferdinand, Count of Flanders) は、1212 年、フランダース侯爵夫人ジョアン (Joan, Countess of Flanders) と結婚したが、ブーヴィーヌの戦い (the Battle of Bouvines) において、イングランドと同盟して、フランドルの部隊を率いていた。<sup>18</sup> 政治的才能と能力は疑う余地がないアルフォンソ 8 世または、欠地王ジョン (John the Lackland) が欧州中南部の全ての王子たちを結婚させて親戚にさせるという計画を思いついたのかもしれない。これは絶え間ない戦争によって引き裂かれたそれぞれの君主国の政治的同盟の道具になる予定であった。このイングランド王の野望や憎悪にもかかわらず、ポルトガル王はその計画に賛同していた。<sup>19</sup> このようにして、イングランドとポルトガルの友好関係は十字軍の時代に始まったと

言える。

### 3. イングランドとポルトガル間のいくつかの条約の役割

まず、英ポルトガル間の初期の通商関係を考察しよう。

ジョン王(King John)の4年目の開封勅許状(Patent Roll)には以下の記述がある。<sup>20</sup> ポルトガル王の国の全ての商人へ。商品を我が国に持ち込む他の人々が支払う合法的な関税を支払い、あなた方は我が国に安全に来ることができ、あなた方の財や商品を持って、帰国することが許されたことを知れ。そしてあなた方が当地に来るとき、あなたがたと、あなたがたの財と商品を、我々の保護と保管の下においた。2年後ポルトガルとスペインの商人のために、イングランド王の領土において、交易をおこなう完全な認可を与える、同様の特許証が発行された。彼らが主要債務者ではなく、債務者の保証人ではない場合において、負債ゆえに、逮捕されることから守られる特別条項がついていた。このようにして、13世紀の正に初頭において、ポルトガル商人はイングランドへの道を既に見出していた。そして、イングランドとのポルトガルの貿易のためには、イングランド王から、イングランド王の領土において、貿易商としての彼らの地位の公式の承認と認可を確保することは、採算がとれると判断した。当時、英国人はあまり商売をする類の人々ではなかった。そして、毛織物(wool) 錫(tin) 鉛(lead)のようなイングランド製品は通商世界ですでに大市場を持っていたが、イングランドの外国との貿易は今だほとんどすべてが、外国商人によって継続されていた。海賊行為、難破または没収(arrest)の多くの危険は、イングランド市場に財を持ち込む外国商人によって、勇敢に挑戦されなければならなかった。そして、イギリス人がこのような危険に自ら直面するときまで、外国財を持ち込む外国貿易商の訪問に、イングランドにおける外国財の供給は依存した。状況はこのようであったが、外国商人が訪問を継続するように奨励するような大きな努力はなされなかった。

イングランドにおける通商の規制は、完全に王の手中にあった。そして外国商人は、取引継続許可のために王のえり好みに依存していた。王様に思い通行税を支払うことなく、外国商人はイングランドに入り、出国したり、どの町においても住居を構えたり、あちこちに移動したり、売買することができなかった。マグナカルタ以前は、イングランドにおいて、とにかく外国商人は明確な地位がなかった。彼らは王様の保護を買わなければならなかった。そして、これは不正な強要の余地が十分残された条件下で、条件付きで与えられることがあった。

しかしながら、このような障害にもかかわらず、イングランドと貿易を継続することは、十分価値があることを、外国商人達は知るようになった。そして、ジョン王の統治の初期の時期において、この目的のために、王家の特許証(Royal Letters Patent)を得た真っ先の人々は、既に述べたように、ポルトガルの商人であった。2つの貿易の自由の付与以外に、イングランド王の領土にポルトガルの商人たちが、定住し始めていたという別の証拠がある。12世紀末のものと想定されるダブリン(Dublin)の居住者の一覧において、貿易

のその重要な中心地において既に書きルツされたポルトガルの現地人の名前がある。一方では、1220年に属する王室政令(royal order)において、ポルトガルのあるバルトマイ(Bartholomew)が貿易を一緒に行うロンドンの4人の市民の一人として言及されている。そして、没収された財の問題に関して、この人の権利は3人の英国人の権利と同様に、王権(royal authority)によって承認されている。早くも1208年には、もう一人のポルトガル商人がジョン王から、正当で合法的な関税を支払う限りにおいて往来における完全な自由がある王の領土内を通して安全に通商を行う権利を与える特別通行証を獲得している。イングランドにおいて通商を行う全ての商人に7年後に男爵によって名目的に確保された権利があった。しかし、よく議論されたマグナカルタの41条は効力がなかった。<sup>21</sup>そして、王室の特別通行証を確保する必要性は決して除去されたわけではなかった。

ヘンリー3世の下では、ランゴバルド王国(Lombards)やプロバンス人(Provincals)のような特定の国籍を持つ商人達は、法律上で大いに有利であったが、他の外国商人達は、王から購入することができる保護の特許状(letters Patent of protection)を除いては安全の保証がまだなかった。ポルトガル商人たちはこのことに十分気が付いていたので、ある年、1226年には、100以上の特別通行証がヘンリー3世から、ポルトガルの商人達によって、彼ら自身、彼らの財や商品のために確保された。ポルトガル王国が最近になってやっと獲得した独立の為の厳しい闘争を考慮すると、ポルトガル商人のこの初期の活動はより注目し得る。しかしながら、保護状に対する、この機会に見せた彼らの異常な心配は、大型ポルトガル船ラ・カルディナーレ(La Cardinale)のヘンリー3世の命令による海上での拿捕に起因した可能性がある。この船と、その船荷の運命は、1225~26年の封緘書状録(the Close Rolls)に現れているように、外国商人を扱うヘンリーの任意法のよい実例であった。そして、同時に、ポルトガル商人がイングランドと貿易を継続するために持った不確実な条件のある種のアイディアを与えている。1225年9月、ヘンリーの騎士や従者が、大型船で、ガスコニュ(Gascony)から帰る途中で、ラ・カルディナーレに遭遇した。その船には30人のポルトガル船員と商人が載っていた。

イングランドとポルトガル間における関係で、注目される時期とは、ディニス(Diniz)王の治世であった。通商合意を含めた二か国間の通商関係を奨励するための様々な施策がなされたのである。

アフォンソ三世(ポルトガル王)はアルガルヴェの南端(シルヴェスとファロ)からムーア人を追放して、1249年にレコンキスタを完成させた。<sup>22</sup>こうしてポルトガルは最初の欧州国民国家(the first of the European nation-states)になった。アフォンソ三世の治世の間、リスボンは政府の所在地として、国際貿易と共に急速に発展した。<sup>23</sup>

1279年、アフォンソ三世の跡を継いだディニス一世の治世はポルトガル中世の最盛期であった。そして、ディニスの即位はイングランドとポルトガルの友好関係に大きな弾みをつけさせるものであった。農業を国富の主要源と考え、未使用の土地を小作人農夫に委任し、湿地の水はけを良くし、穀物や他の作物の植え付けを奨励した。農業を追求する貴族には特

権を与え農業を奨励した。それゆえに農民王（O Lavrador）の異名で知られている。<sup>24</sup> すぐにポルトガルは、穀物のみならず、海洋干潟からの塩ならびに乾燥果実、アーモンド、干しブドウ、オリーブ油、コルク、ワイン、イチジク、ブドウを輸出できるようになった。こうした手法は、麻布（linen cloth）や他の切望された商品をポルトガルが輸入することを可能とした。外国貿易が奨励され、海上での損失に備えるための文書を作成した。それは、一種の海上保険であった。<sup>25</sup>

欧州諸国に対する農産物輸出のみならず、ディニス王は、余剰分の輸出が可能な、銀、錫、鉄、銅を産する鉱山の開発を命じた。

1293年、ディニス王は、外国都市にあるポルトガル商人の保護の基金を設立した。造船業者のギルドが海賊に強奪されたり、他の国々で関税支払いを強制された不運な商人を補償するために使われる基金に寄付した。その上、商人の相互保護のためにフランドルとイングランドの営利団体との協定をもたらした。<sup>26</sup>

ポルトガルの商人のために、ディニス王は、彼らにとって最も重要な貿易を持つ諸国の支配者たちと友好関係を維持することを試みた。治世期間中、エドワード1世（イングランド王）や、その息子であるエドワード2世と、主に通商事項に関して書簡のやり取りを継続した。1295年1月の日付の書簡で、次のことが指摘された。エドワードの臣民とカスティーヤ(Castile)の臣民の間で続行された小規模な武力衝突が、危険を及ぼさない商人達に多くの苦しみをもたらしている。それゆえ、平和の再確立に向けて行動を起こしてほしいとイングランド王に懇願する。また別の書簡では、ポルトガル商人を代表して、エドワードに対して懇願している。王室関係者によってフランドル向けの商品をイングランドの港で強制的に販売させられていると、多くのポルトガル商人が苦情を述べている事態がある。エドワードはこれが不正であることを理解しなければならないこと、そして、特に友好的な王の商人達の場合なら、なおさら省みなければならないことを指摘している。そしてそれゆえ、ポルトガルの臣民たちが自由にイングランドに行き来することができることを要求している。そして同時にエドワードの臣民達もポルトガルにおいて同じように優遇されることを約束している。<sup>27</sup>

イングランドとポルトガルは1308年に彼らの最初の通商合意に調印したと言われる。<sup>28</sup> これはディニス王がエドワード2世に宛てた書簡である。そこでは、両国の臣民達の間非常に長い間存在していた友好関係に注目を集めさせる重要で長い書簡であった。ポルトガルにおけるイングランドの臣民のための安全通行権の新しい手紙を、イングランドにおけるポルトガルの商人達に対しても同じような手紙が与えられることを望みながら、添付して送っていることをディニス王はエドワードに通告した。そして、あえてあるキャストリア人の悪名高き行いを言及した。彼らはポルトガルの国旗と記章を装おい、海賊行為という罪を犯してきたのだ。こうして、エドワードの疑いを知らない臣民達は、ディニス王の臣民達に対して怒ってきた。ディニス王がひどく嘆く事実であった。この手紙に対するエドワードの返答には安全通行権が付随されていた。イングランドとポルトガルの最



初の通商条約であると評されてきた。しかしながら、ディニス王から受け取った手紙の返事という単純な形態であるから、重要であるにもかかわらず、このような名誉に対する正統な権利を主張することはできない。イングランド王は二か国間の商人達の中に存在している愛情の絆が言及されていることに対する喜びを表した。その絆はいつも変わることがないであろうと王は信じている。イングランド王に関する限り、キャストリア人の不誠実な行為は、この友情に偏見的な影響を与えさせないことを約束した。そして、王はポルトガルの商人達のために要求された通行証を発行することはとても喜ばしいことであることを宣言した。

イングランドとポルトガルの関係の歴史において、ディニス王ほど、イングランドとの友好関係の改善を切望した王は他にいないであろう。<sup>29</sup>

アフォンソ 4 世 (Alfonso IV) は 1325 年に第 7 代ポルトガル王になった。自分の娘とイングランドの皇太子の間で結婚の取り決めをするためイングランドに使者を送った。しかしながら、この結婚の申し込みはうまくいかなかった。ポルトガルのこの使者は言付けと共に送り返された。そのような重要な案件を扱うには、彼らは十分高い地位にないという内容であった。そして、それからアフォンソは将官マヌエル・ペサーニョ (Emanuel Pessanha) を送ったにも関わらず、これ以上の実質的な成果を得なかった。エドワード 3 世は即位してすぐに、すでに確立されている繋がりを保持していくという強い願いを最初から見せていた。エドワード 3 世の治世で、イングランドは初めてポルトガルと公式な同盟関係を開始した。ポルトガルの商人達は、エドワード 3 世が信頼できる友であり、保護者であることを知った。そして、イングランドに対するポルトガルの通商の価値によって、部分的な影響をエドワード 3 世は間違いなく受けていた。エドワード 3 世にとっては、純粹に通商上の考慮が重要であったが、ポルトガルと良い関係を維持するための別の理由があった。彼はフランスと激しい闘争の中にあつたので、彼の利益の中に可能な限り多くの支配者達を引き付けておくことが当然のことであった。彼らが敵との同盟を結ぶことを妨げたり、必要であれば、戦場で戦うために、彼らから、船や兵士の援用を可能にしておくことも当然必要なことであった。イングランドのフランスとの戦争開始数年後、エドワードはポルトガルとの曖昧な友好関係以上のものを状況が必要とさせていると決心し、1345 年アフォンソ 4 世宛の書簡を持たせた大使を派遣した。その書簡でエドワードはポルトガルとの同盟を最も必要としていることを明白にした。それゆえ、エドワード 3 世は、持参金やそのほかの必要なことに関して、何であろうが決着させることに同意するという約束をし、彼の息子の中の一人と、アフォンソの娘の中の一人を結婚させることを提案した。同時にイングランドの臣民によるポルトガル商人たちへの虐待を防止するための新たな命令が発せられた。

1347 年、多くの議論の後に結婚の合意がなされた。イングランドの大使たちは結婚式の日を決定するためにポルトガルに到着した。しかし、彼らは結婚式を執り行われなことを告げられた。アフォンソは間際になってイングランドとの同盟を避けたのである。その

理由は定かではない。その代わりに、1347年にポルトガル王アフォンソ4世の王女レオノール(1328年-1348年)はペドロ4世(アラゴン王)と結婚した。一方、イングランド王はこの計画の失敗は自分のせいではないと抗議することしかできなかった。この後、数年後にエドワード3世はポルトガルの商人達と条約を結ぶのであるが、イングランドの王とポルトガルの王が公式の同盟関係を開始するのは1373年になってからのことであった。この時のポルトガル王は他ならぬフェルナンド1世であり、本人の困難な状況から脱出するための手段として、その同盟を提案したのである。<sup>30</sup>

エドワード3世(イングランド王)は1351年にマリスマス協会(the hermandad de las marismas)と条約を締結した。これはイングランドの港におけるスペインの商船の保護を保証するものである。そして、1353年には、リスボンとポルトの商人達と船員達と同じような誓約をした。彼ら自身と彼らの商品のための通行証を与え、イングランドのどの港においても、彼らが取引することを許した。ただし、現地民と同じだけの通行料金の支払いを課せられはしたが。<sup>31</sup>

#### 4. 1654年英ポルトガル条約(Treaty of Peace and Alliance, between Oliver Cromwell, Protector of England and John IV, King of Portugal)<sup>32</sup>

この条約は主に通商条約であった。なぜなら28条の中で24条までが、通商に関する事項を扱っていたからである。英文でのこの条約の名称は”The Treaty of Peace and Alliance between Oliver Cromwell, Protector of England, and John IV, King of Portugal”であり、名称からは、そのことが伺えない。<sup>33</sup> 英ポルトガル間では、通商関係が重要事項であることが推定される。

この条約はイングランドのプロテスタント商人に対する特権と宗教の自由を規定している。この条約後、イングランドの工場がリスボンやオポルト(Oporto)に徐々に設立されるようになった。イングランドの商人達はオポルトの北部、ビアナドカステロ Viana do Casteloに長い間、本拠地とし、そこから、ミニョ州(Minho)でまだ生産されていたヴィーニョヴェルデ(vinhos verdes)におそらく似通った地場の軽いワインを輸出した。しかしながら、それらは日持ちが悪かった。そして1670年代と1680年代の間、多くの商人達は、アルコール度のより強い、よりコクのある(fuller bodied)ワインをより遠くの所まで探し始めた。

ポルトガルの保護貿易政策は、イングランド商人たちがそうすることを、困難にさせた。

1654年7月10日に調印された英ポルトガル条約は主だって通商条約であった。なぜなら、28条項の内、24条項が通商に関する事項を扱っていたからである。そうであっても、この条約は、イングランドの護国卿、オリバー・クロムウェルとポルトガル王、ジョアン4世の間の平和と同盟の条約という題名を付けられた。<sup>34</sup>

イングランド王と議会が衝突している間、ポルトガルとイングランドの関係はほとんど停止していた。しかし、1649年1月30日、チャールズ1世を処刑した後で、同年11月30日、2人の王子ルパート(Rupert)とその弟モーリッツ(Maurice)は11隻の戦艦でタホ

川 (the Tagus) を航海した。ポルトガル政府は両党によってその港が利用されることを望んでいることをすでに宣言していた。そして、ポルトガルの領海における衝突を避けるために、船舶の交互の入港と出港に関する規則を定めていた。しかしながら、両王子はジョアン 4 世(John IV)によって歓待されたが、彼らはタホ川を海事作戦基地として使い始めた。イングランドの船舶を拿捕し、売却するためにリスボンに運ぶのみならず、ポルトガルの移民船を拿捕した。

タホ川のこうした略奪者の存在は、平和な商船を当然のことながら、追い払い、リスボン港の通商を損ねた。しばらくの間、ルパート王子は、カスカイス (Cascais) の海軍軍人ブレイク (Blake) が到着するまで、1650 年春においてより毅然とした態度を取るよう余儀なくされたポルトガル政府の覚書を無視した。<sup>35</sup> 特命使節チャールズ・ヴェイン (Charles Vane) はジョアン 4 世に、王子たちと彼らの船舶の明け渡しを要求するために派遣された。これは拒否され、しばらくの間、ブレイクはタホ川に強制的に侵入することを熟考した。しかし、河口にある城塞の配置はあまりにも強固であることが判明した。ヴェインを通して、圧力を更に加え、入港することを許可するか、さもなければ王子たちを追放することを要求した。両方の要求は却下された。そして、ブレイクはブラジル船団から砂糖を満載した 14 隻の船を強奪した。ブレイクの河口を封鎖する試みは失敗に終わった。そしてスペイン港から物資供給を受けることが困難であったので、10 月にそこを離れざるを得なくなった。すぐに、王子たちは出講し、12 月に地中海沿岸にあるカルタヘナのスペイン港に保護を求めたが、(Cartagena)沖でブレイクに手痛い敗戦を喫した。<sup>36</sup> ジョアン 4 世はチャールズ二世の公儀 cause に味方したが、ルパートとモーリッツの悪しき振る舞いは、イングランド共和国 (the Commonwealth) との和解を求めることになった。オランダとスペインの結合された敵意ゆえに、いずれにせよそうすることが必要であった。1650 年 12 月、新しい条約を結ぶために João de Guimarães が特命使節としてイングランドに派遣された。

議会の対応は全く冷たいものであった。この使節をサザンプトン (Southampton) で監視下におき、どんな権威によって、イングランドにやってきたかを議会が判断できるように、ポルトガル王からの信任状を提出するように厳格に要求する書状を準備した。Guimarães の外交上の地位は、大使なのか、係官なのか、全権公使なのか、一体何であるか明らかにすることを要求したのである。その書状はいかなる交渉においても、議会の立場に関する事前予告を与えていた。<sup>37</sup> すなわち、交渉開始前に、国家評議会 (the Council of State) は、以前の冬の出来事の中のイングランドの商人やブレイクの艦隊に対して生じられた損害と支出の賠償と賠償金を扱う 6 つの条項に、特命大使が合意することを要求した。この事が合意され、遂行されるまで、議会は考察することを拒否した。ポルトガル特命大使は帰国し、大使である (the Count of Penaguião) がその代わりになり、6 つの条項に合意するという命を受けて 1650 年 9 月にイングランドに到着した。そして 1642 年条約を更新させたのである。

しかし、議会は異なる考えを持っていた。イングランドの商人達は、条約に含めてもらいたい 38 の要求を提出していた。そしてこのような点は 9 つの追加条項の題材を提供した。交渉する材料がなにもなく、Penaguião はほとんどすべての点で譲歩することを余儀なくさせられた。その結果、条約の草稿は、各当事者は互いの全ての植民地と貿易する権利が与えられ、イングランドの戦艦は供給や修理のためにポルトガルの港に入港することを許すものとした。リスボンにおけるイングランドの商人達は広範囲に及ぶ特権を受け取った。彼らは、犯罪行為で連行される時以外は、特別判事である後見者 (Conservator) が発行する令状によってのみ逮捕されうる。彼らは免除される。死亡すれば彼らの所有する墓地に埋葬される。ポルトガルの法廷は、彼らの財産に干渉する権利を持たない。彼らは 23% を上回る海関税 (customs-dues) を決して払うことはないし、彼らの合意なしに、この関税を変更されることはない。イングランドのポルトガルにおける通商上の覇権を決定したものはこの 1654 年条約、すなわちほかならぬイングランド共和国条約 (the Commonwealth Treaty) であった。<sup>38</sup>

経済的低落の根源はポルトガル自身の境界内に存在した。1654 年の条約は英国商人の立場を過度に有利な立場に置いた。イングランドの法律を超え、ポルトガルの法律の外において、商人達が一つの国の中に一つの国を形成することを許したのである。<sup>39</sup>

1808 年 1 月 28 日の法令はブラジルの港を世界貿易に開放したのだが、その年までは、この植民地の通商はポルトガル人とポルトガル船舶に限定されていた。ただし例外があり、それはポルトガルの保護国であり同盟国であるグレート・ブリテンであった。1654 年の条約によって、英国の商人はポルトガルとブラジルの港間の貿易をすることを許された。英国船舶はリスボンでの公式入港手続きを無視し、ブラジルとの直接的禁制品通商に精を出していたのである。1808 年の自由貿易法令はブラジルの通商をグレート・ブリテンが実質的に支配していることを再確認したに過ぎなかった。<sup>40</sup>

ついでながら、この 1654 年の条約は、イングランドが中国大陆における唯一のヨーロッパ人居留地となったマカオとの通商することを公に認可した。<sup>41</sup>

1640 年、スペインから分離したポルトガルは、即座に英国といわゆる 1642 年、1654 年、1661 年の三重条約を開始した。原型の 1642 年条約は、大部分が、それから 200 年間の基本的パターンを確立させた。その条約は英国に重要な域外管轄権と合わせて最恵国待遇を与え、ポルトガル法からの免除を与え、ポルトガルにおける英国臣民に対して宗教的寛容を認めている。その見返りとして、英国は、ポルトガルがスペイン君主から独立していることの公的承認をポルトガルに与えている。1654 年条約はポルトガルにおける英国人が獲得した諸条件をブラジルと西アフリカに拡張した。1661 年条約はポルトガルを防衛するという秘密条項が付け加えられた。<sup>42</sup> ポルトガルの君主に属する全ての占領地または植民地を現在と同様将来における全ての敵から実際に守り、保護するようにグレートブリテンの王は誓い、義務とすることをその条項は規定している。法的観点、そして、大体において実際の

な観点で見ても、英ポルトガル同盟の中心的特徴はこの秘密条項に最も明白に定義されている。<sup>43</sup>

## 5. メシュエン条約

経済的後退の原因はポルトガルの内部にあった。英国の通商の優勢はメシュエン条約から始まったものではなく、英国商人の立場を極度に有利なものとした1654年の条約から始まった。

ペドロ2世(1648-1706)はアフォンソ6世(勝利王)の弟であり、兄が死去するまで、摂政王太子(prince regent)として国を支配した。ペドロ2世は当初、スペイン継承戦争でフランスを支持したが、メシュエン条約ゆえに不本意であったが、イギリスに従属した。<sup>44</sup>

キャサリン・オブ・ブラガンザ(Catherine of Braganza)はイングランド王チャールズ2世の王妃であり、後のポルトガル国王ジョアン4世の次女であった。ジョアン4世は、ポルトガルの独立を守るため、イングランドとの同盟関係を樹立する必要があった。そこで娘をチャールズ王太子(チャールズ2世)に嫁がせた(1662年)。この結婚は2カ国間の長期的な貿易上の結び付きを強化した。<sup>45</sup> キャサリンは世継ぎを産まなかったことにより、チャールズ2世が死去したのち、ポルトガルに帰国し、メシュエン条約を支持したり、弟のペドロ2世に摂政として仕えた。<sup>46</sup> 1702年に駐ポルトガル大使としてメシュエンはポルトガルに戻ったが、ポルトガルをフランスとの同盟から離し、第二次大同盟(second grand alliance)に参加するように促す指示を与えられていた。メシュエンは、当時病弱であったペドロ2世とキャサリン・オブ・ブラガンザと友好的な関係を構築することに成功した。キャサリンは2カ国間のより緊密な関係樹立を望んでいたため、キャサリンの支援もあり、ポルトガルを説得し、同盟国と和解することがいかに価値があるかを信じさせることができた。<sup>47</sup>

ペドロ2世の後継者であるジョアン5世(1706-50、寛大王)が即位する前に、メシュエン条約によってポルトガルはスペイン継承戦争に巻き込まれた。しかし、アルマンサ(スペインのレヴァンテ地方、1707年)の大敗北の後、ポルトガルは戦闘では役割をほとんど果たさなかった。この戦争後、ポルトガルはイングランドとの同盟を維持しようと努めた。<sup>48</sup>

在ポルトガル英国商人の役割が重要であった。英国の商人はますますポルトガルに拠点を獲得していた。その足掛かりは古くから存在するものであり、早くも15世紀には、ポルトガルの英国商人達は特権を獲得していた。例えば、武器の所持や家屋の所有の権利、ポルトガル兵役、様々な税や申告の免除があった。<sup>49</sup>

リスボンやオポルトに拠点を構えていた。イングランドの布を運び込み、現金の方が好ましかったが、その支払いをワインで受け取ったりしていた。現金払いが好まれたのは、英国消費者がポルトガルの渋いワイン(rough wine)よりもフランス産ボルドー赤ワインをはるかに好んだからである。<sup>50</sup>

イングランドのワインの船荷主はこの機会を最大限に活用し、ポートワイン貿易が開花した。ポートワイン貿易にイギリスが強力に関与したことは、ポートワイン船荷主の名前の中に見出される。すなわち Cockburn, Croft, Dow, Gould, Graham, Osborne, Offley, Sandeman, Taylor そして Warre 等である。かれらはポートに定着し始めたのだ。Warre, Sandemans Grahams、Taylor の子孫たちは今日でも紳士クラブを形成し、ワインについて協議している。<sup>51</sup> しかし、イングランドがポートワイン貿易を完全独占したわけではなく、Niepoort や Burmester というようなオランダやドイツの船荷主も有名であった。<sup>52</sup>

メシュエン条約はポルトガル産ワインに有利な差別関税を賦課した。この差別関税のみならず、1703年を含めて当時、イングランドはフランスと交戦中だったので、イギリス人がフランスワインを入手することは困難であった。<sup>53</sup> 従って、経済的手段と外交上の2つの理由によって、ポートワインをかつてのワインの代替物とすることになった。<sup>54</sup> メシュエン条約はイングランドのポルトガル産ポートワインの輸入を促進し、イギリス人の酒として封印したのである。<sup>55</sup> イギリスにおけるワインの埋蔵物の中には数多くのポルトガルのラベルや荷札が見出されることもその部分的証拠である。<sup>56</sup>

18世紀初頭におけるポルトガルの外交事情は、スペイン継承戦争によって複雑になった。戦争中、ポルトガルは最初フランスと同じ側にいたが、1702年春にポルトガルに海軍船隊を派遣したイングランドからの圧力によって、1703年5月16日に反フランス同盟に加わった。同日、英国とポルトガルはリスボン条約に調印した。これは2カ国の永久同盟を宣言するものだった。そして2つめの英・ポルトガル条約、すなわちメシュエン条約は1703年12月27日に調印された。ペドロ2世(ポルトガル・ブラカンサ王朝の国王)とアン(イングランド・スコットランド女王)の間に誕生したこの条約はメシュエン通商条約として知られ、イギリス大使のジョン・メシュエンにちなんで名づけられた。この条約の条項下では、英国は毛織物(wool cloth)をポルトガルに輸出することが許された(1677年にポルトガル政府は英国の毛織物品(woolen)の輸入を禁止した)。そしてポルトガルは英国にワインを有利な条件で輸出する権利を得た。この条約の政治的帰結は明示的に述べられていないが、両国にとって顕著な価値を持つものだった。この条約はポルトガルとブラジルの統合を保証する英・ポルトガル同盟の継続の頼みの綱であることが判明した。この条約は英国貿易家の通商上の強い願望、特にブラジルとの実質的な直接貿易を確保するという目標を満たすことはできなかったが、英国貿易家はポルトガル植民地との間接的な貿易の自由なアクセスを与えられた。付け加えると、この条約の間接的な結果として、ジブラルタルの貿易と維持の為に重要な西方側面を確保したのである。ジブラルタルは地中海勢力としての英国の出現のための要所であった。<sup>57</sup>

1703年の条約でメシュエンと名前が付けられた条約は合計3つあると見なすことができる。そのうち2つは1703年5月に調印された。これらは政治的な条約で、それぞれの内容は、攻撃的条約と防衛的条約である。そしてもう一つは12月に調印された。これは通商条約である。<sup>58</sup>

1702年5月、ジョン・メシュエンはリスボンに特命公使として派遣された。ポルトガルの同盟(the Grand Alliance)に対する固執を交渉するためである。そして1年後、そのために必須の条約が結ばれた。1703年12月、明示的な権威がないまま、自分の名前を付けた有名な通商条約を締結させた。わずか3条から成っている。しかし、実質的には2条である。その中の1条は英国の布を後の禁止に至るまで関税に従ってポルトガルに、輸入することを認めている。もう1条は、英仏が戦争中であろうと、平和であることに関わらず、ポルトガル産のワインをフランス産ワインに対する関税よりも3分の1低い関税で英国に輸入することを認めている。この条項がどんな時でも侵害されるなら、ポルトガルは英国の布輸入を禁止することを正当化できる。<sup>59</sup>

この条約は極めて適切な時期に誕生した。イングランドのポルトガル領のブラジルとの伝統的な貿易は煙草と砂糖であった。しかし、タバコは段々とヴァージニアのたばこが取って替わった。公開条例の影響もあり、イングランドの植民地の砂糖はブラジルからの砂糖輸入をほとんどすべて取って代わった。しかしながら、1688年以来、イングランドはフランスと戦争中であり、イングランドに輸入されるポルトガル産ワインはフランスに適用される関税の半分を払えばよかった。この優位は平和が一旦成立すると、消滅する見込みだった。一方、イングランドの毛織物産業は17世紀末に大きな拡大の時期を持ったが、1701年と1702年の市場の制約に起因する重大な危機に瀕していた。<sup>60</sup>

ポルトガルにおいてはエレセイラ伯爵は、最後の手段である1690年1月の毛織物業規制において、保護立法の不十分さを認識していた。なぜなら、ポルトガルの毛織物の品質は概して改善されないままだったからである。1690年、この伯爵は死去し、影響力が弱体化した。そして、メシュエン条約によって、ワイン貿易を利益の上がるものにしておくために、新進のポルトガル毛織物産業は犠牲になったのである。<sup>61</sup>

特徴の一つはこの条約には最恵国待遇条項が含まれていないことである。これが含まれていれば、貿易相手国間での差別を減じて、関税削減を確実なものにできる。メシュエン条約はフランスに対して差別を行い英ポルトガル貿易を有利な立場に置いた。<sup>62</sup>

メシュエン条約締結後はどのような状況であっただろうか。

1703年のメシュエン条約で、イングランドがポルトガル産ワインを購入し、ポルトガル植民地の維持を支援するなら、ポルトガルは新進の繊維産業を断念することに合意したという。ポルトガルはイングランド製造業の財にますます依存するようになったが、ブラジルの金でこれらの財が購入されることとなった。<sup>63</sup>

欧州諸国と新世界のおかれている立場は重商主義政策をさらに進展させる原因であった。様々な国々との貿易の差異は、特定の国々との貿易を奨励し、その他の国々との貿易を妨げる積極的な試みを導いた。新世界は、関税賦課を用いた。欧州諸国が好んで使ったのは通商条約であった。加工してから輸出することが可能な原材料を供給しそうであるか、またはさらにより良いことだが、金銀を過剰に保有国においては、特定の優位が提供されることによって、交易をするように誘引される。ポルトガルは、フランスに対抗する優位として、ポル

ポルトガル産ワインに対する優位をメシュエン条約を通してイングランドから受けた。その理由はポルトガルがブラジルの鉱山の支配権を持っていたからである。<sup>64</sup>

そしてこの条約はフランスのワイン貿易に打撃を与えた。この条約によってポルトガルのポートワインはフランスよりも3分の1低い関税を課せられて英国に輸入された。英国はポルトガル産のワインよりもフランス産ワインを選好したので、多くの密輸を生み出すはめになった。下層階級の人々はワインを購入する余裕がなく、ラム酒やオランダ製のジンで切り抜けることが出来た。<sup>65</sup>

ポートワイン（ポルトガルの暗紅色の甘いワイン）はスコットランドでのウイスキーが果たした役割と同じ役割を果たしてきた。それはあえぐ経済から英国への利益のある輸出品としての役割である。英国商人はすでにリスボンとオポルトに拠点を構え、英国の布を出荷し、必要な場合はその支払いをワインで受け取った。現金での支払いが好まれた。なぜなら、英国の消費者はポルトガル産のワインよりもフランス産ボルドーの赤ワインをはるかに好んだからである。<sup>66</sup>

ポルトガルは毛織物市場として、非常に重要な市場と見なされていた。ポルトガルはその国内消費の為にその輸入に依存し、ポルトガルの植民地に毛織物の輸出をしていたからである。（本当か）フランスとイングランドはこの市場を確保することを切望していた。そしてそれゆえ、イングランドは特惠を確保するべきであることが最重要事項と考えられていた。従って、イングランドはポルトガルワインに対して顕著な犠牲を払って特惠を与えた。つまり、ポルトガルワインはフランス製ワインのいつも3分の2の関税を支払えばよかった。その時までイギリスの消費はフランス製ワインを選好していたが、この条約の特惠はフランス製ワインとブランデーの合法的貿易を縮小させ、19世紀初頭まで密貿易を繁栄させることになった<sup>67</sup>

メシュエン条約以来、イギリス政府は最も人気のあるワインに対する財政的取極めを継続的にいじくり回していた。ワインは需要が大きいのみならず、大量貯蔵容器で出荷されるので、結果的に容易に課税可能な商品であったからである。<sup>68</sup>

メシュエン条約調印から、10年経過して、ボリングブロウク(Bolingbroke)は新政策を導入する努力した。フランスとの通商条約を交渉した。その協定の中ではどう見ても、メシュエン条約を終結させるものであった。最恵国待遇が与えられている財と同じ条件ですべてのフランス財を輸入することを考慮した条約である。つまり、英仏が相互関税削減を行い、比較的自由な貿易を持つことを意図した。<sup>69</sup> 残念なことに、イングランドにとってはボウリングブロウク(Bolingbroke)が示唆した政策変更に対して、人々は十分準備できていなかった。政治著述家たちはフランスとの貿易は外のあるものであり、ポルトガルとの貿易は有益であること示し始めた。議会はこれらの議論の誤謬を発見することができなかった。イングランドの庶民院はこの条約をぎりぎりの過半数で却下した。それから70年以上、フランスとの通商協定のことは取り上げられなかった。1787年、小ピットがボウリングブロウクが提案した政策を再び取り上げて、英仏条約を締結した。この条約は戦争によって中断され、



短命であった。<sup>70</sup>

ポルトガルに自由貿易を課したことは、ポルトガルの将来有望な繊維産業を全滅させ、ワインに対する成長が緩慢な市場が残された。一方、イングランドは、綿布の輸出は蓄積、機械化、産業革命の急速な成長を導いた。<sup>71</sup>

この条約はポルトガルとブラジル貿易における重要な特権を英国産業と商業に与えた。<sup>72</sup> 英国が成長するブラジル市場に貿易でアクセスすることを可能にした。<sup>73</sup> ブラジルの金は英国の産業革命の資金源になった。<sup>74</sup> この条約によって、英国がポルトガル産ワインを購入し、ポルトガル植民地保持を支援するなら、ポルトガルは生れかかっていた繊維産業を取りやめることに合意することとなった。ポルトガルは英国産業の製品にますます依存することになり、その支払いにはブラジルの金が使われたのである。<sup>75</sup> この条約の結果の一つは、ポルトガルからロンドンへのブラジルの金の輸出増大であった。毎月、通関手続を免除された2隻の戦艦がリスボンに來た。これらの船はポルトガルを合法的には持ちだすことのできない金を英国に運んだ。<sup>76</sup> ポルトガルがブラジルに供給することができない財を英国から輸入し、ポルトガル産ワインの販売であてがうことの出来なかった分をブラジルの金によって支払われた。ブラジルの金貨は当時英国の共通通貨であった。<sup>77</sup>

メシュエン条約に基づいて締結された平和(条約?)によって、英国製品はスペイン半島(ポルトガルとスペインの場所?)に自由に参入することが許された。(よく理解できない)<sup>78</sup>

メシュエン条約後、ポルトガルは英国と緊密な関係を持ち、ポンバル(Pombal)の啓発された暴政下で、ポルトガル帝国を強化し、近代化する多くの手法が採られた。<sup>79</sup>

英国はこの条約によってポルトガルで大きな優位を得た。<sup>80</sup> これらの手法はポルトガルにとって不利なものであったことが判明したと考えられている。なぜなら、ポルトガル北部の多くの農夫は穀物耕作地をブドウ栽培のために断念したので、穀物輸入を必要なものとさせてしまった。その一方では、2カ国間の貿易赤字はブラジル金鉱からの金による支払いによって埋められた。今度はこのことが為替相場に影響を与え、リスボンよりもロンドンにおいて増価し、その結果、ロンドンは銀行や通商の中心地としてより重要な存在となった。

81

特にメシュエン条約締結後、イングランドは、ポルトガルの主人を演じたのみならず、ポルトガルに対してほぼ独占的を行った。すなわち、製造品はもとより、些細な生活必需品まで輸入させたのである。幸いなことに、イングランドへのポートワインの輸出は著しいものであった。さもなければ、ポルトガルはイギリスからの輸入財全体を手持ち現金で支払わなければならなかったであろう。1844年、ポルトガルは33946大樽のポートワインを輸出したが、その約75%がイングランドへ輸出された。<sup>82</sup>

1806年にプロセインの軍隊を破ったナポレオンは、残りの主要敵国である英国に対して、降伏を導くことを意図した経済封鎖を宣言した。しかし、ポルトガル経済はこの条約以来、英国との貿易に依存するようになり、この経済封鎖に参加できる立場になかった。その結果、ポルトガルの王室は英国海軍の護衛でブラジルに逃亡し、ナポレオンはポルトガル

を占領した。<sup>83</sup> ポルトガルの王室をブラジルに移住させることは、イギリスの影響力を増大させ、ブラジルとのより直接的な通商取引を持つ為の手段であった。<sup>84</sup> ポルトガルはこの条約以来、英国の重商主意制度の基本的な部分として働き、18～19世紀を通して英国の衛星国家として機能を持った。<sup>85</sup>

ポルトガルをスペイン継承戦争に巻き込んだ。しかし、アルマンサ(1707年)の大敗北後、ポルトガルは戦闘ではほとんど役割を果たさなかった。<sup>86</sup> 基本的にはリスボンとオポルトから英国へより容易な条件で輸入され、裕福な英国世帯で自由に消費されたワインは、社会的地位を認められたイギリス人に対して、痛風をほとんど避けることのできない病気とした。<sup>87</sup> ポートワインの大量飲酒はメシュエン条約によって奨励されたのである。<sup>88</sup>

この条約はフランス貿易よりも、英国がポルトガルとスペインと貿易することを有利化した。英国はポートワイン(port)とシェリー酒(sherry)を選好することが確認された。すなわち、この条約の条項によって、英国は関税を軽減することによって、ワイン貿易においてポルトガルを支援した。その後、英国で飲まれる大部分のワインはポルトガルまたはスペインから輸入された。<sup>89</sup> フランスのブルゴーニュワインの消費がポルトガルのポートワインによって置換されることにこの条約は貢献した。<sup>90</sup>

ポートワインの存在はイギリス人の勤勉さ(産業)に主に負うと言われている。ポルトガルからイングランドへのワイン証明された輸出は14世紀にさかのぼるかもしれないが、イングランドとポート間の貿易が規則的にそしてかなり大きくなったのは16世紀後半になってからである。当時、冒険好きなイングランド西部地方の商人達、そのほとんどはデボンシャーの人々であったが、ポートとリスボンに出かけて、そこに定住した。彼らの主要な事業は、ポルトガルによって発見され、他の全ての国々に対する貿易を閉じられているブラジルの生産物をポルトガルで購入し、イングランドに送ることであった。<sup>91</sup>

17世紀の間、大西洋を巡航するイングランドの艦隊はポートまたはリスボンで修繕することをたびたび命じられた。そしてそこで、乗組員が飲むために大量のワインを船積みした。ラム酒は当時知られておらず、軍艦の全ての乗組員はワインの日当が与えられた。艦隊に対するそのような命令はポートのイングランドの商人が、ブドウ栽培とドーロ川の陽光の照り付ける丘に沿ってワイン醸造用のブドウ園を作ることに空き時間を費やすことを誘因することの助けとなった。wine and wine trade Simon p.55 から、

17世紀末に三番目に新しく創造されたワインはポートワインである。この名称は、そのワインが輸出された町にちなんでつけられた。フランス産赤ワインやシャンペーンの場合のように、ワインが熟成できる瓶を使用することが、その発達に必要とされた。しかし、これらの他のワインとは異なり、寿命が持つか否かは、ブランデーの添加にあった。その上、ポートワインが有名になったのは、イングランドがフランスと戦争中だった時に、イングランドとポルトガルの間で確立された政治的条約に多く依るものである<sup>92</sup>

イングランドとポルトガル間の貿易は17世紀中ごろまでに、増大していた。ポルトガル

の残った海外領土の奢侈財と交換に、イングランドの布を販売することを求める商人や商売の代理人があつて 16 世紀の間に、あるポルトガル産ワイン、特にアルガルベ州やリスボン周辺で生産された甘みのあるワインはイングランドに輸出する道を見出した。しかし、チャールズ二世の治世の間、チャールズ二世は、ポルトガルのブラガンザのキャサリと結婚したにもかかわらず、イングランドには、ポルトガル産ワインはイングランドにほとんど輸入されていなかったように見える。<sup>93</sup>

戦争期間は、フランスのような競合国からの輸入を制限するか除去するという強い圧力を強化した。戦争は貿易に関する通商政策と製造業促進を、貿易を明白なゼロ・サムゲームと見なす固定された見方を促進するような観点から考察するように仕向けた。イングランドは、イングランド財の市場を保証し、ワインや亜麻布のようなフランスからの輸入代替を発展させる二カ国間貿易協定を促進させるために、ポルトガルにおける特権的地位を活用した。<sup>94</sup>

18 世紀中のイングランドの貿易交渉は厳格な互惠性に基ついてなされたとコニーベア (Conybear) は述べる。イングランドとポルトガルはメシュエン条約を通じて、相互利益の条件で特惠関税の交換がなされたという。<sup>95</sup> 特惠的取極めが発効後、特惠関税が扱う品目以外に様々な影響が及ぶことが容易に想像される。それゆえ、ある期間中において、貿易協定から受ける便益を両国が同等に受けるかといえば、それは不明である。しかし、互惠性が実際の交渉の基盤となっているなら、どのような便益が期待されるかは、交渉関係者の立場から推定できるかもしれない。まず、この条約は無数の財とは対照的に毛織物とワインしか扱っていない。そうすると、単純化すると、これは、コートとズボンを着用するポルトガル人とワインを飲む英国人の費用負担によってイングランドの服地屋とポルトガルのワイン醸造業者に便益を与える取極めであつたと言える。

皮肉なことに、ポルトガルワイン貿易は市場諸力よりも政治的制約からもたらされたものだった。フランス製ワインがイングランドの消費者によって嗜好されていたが、外交上の理由で、ポルトガル産ポートワインの輸入を奨励するために、1703年のメシュエン条約下で、イングランドの差別的関税が交渉されていた。<sup>96</sup>

『諸国民の富』でスミスは、メシュエン条約はイングランドにとっては、実際のところ全く不利な協定の一例として選択している。国内消費者に対する不愉快な税を見出した。メシュエン条約によって、消費者は高関税ゆえに近隣の国（つまり協定国以外）から、自分の国では製造できない商品を購入することを妨げられる。しかし、遠距離の国の財の品質は近隣の国の財の品質より劣っていることが分かっているにもかかわらず、遠いところにある国からそれを購入することを余儀なくされる。製造業者が、条約がなかった場合にあり得る条件よりもより有利な条件で、遠い国に生産物のいくらかを輸出することができるように、本国消費者はこの不便さに従うことを余儀なくされる。この強制された輸出は本国市場でほかならぬこれらの生産物の価格の増価分がどれだけ高いものにするにしても、消費者も支払うことを余儀なくされる。<sup>97</sup> メシュエン条約によって優遇された商人と製造業者にとっては、この条

約は有利かもしれないが、優遇措置を与えた国の商人と製造業者にとっては必然的に不利になる。なぜなら、このようにして、彼らにとっては不利な独占が外国に対して与えられ、他の諸国との自由競争が認められている場合よりも、より高い価格で、必要な外国製品を頻繁に購入しなければならない。<sup>98</sup> ついでながら、アダム・スミスは赤ボルドーワインを好んだので、メシュエン条約は馬鹿馬鹿しいほど過大評価されているという。<sup>99</sup>

ポルトガルにとってのメシュエン条約はいかなるものであったか。<sup>100</sup>

ドーロ(Douro)地域は以前、荒廃状態だったが、農業の大規模な拡大がこの条約によって、導かれ、今や大量のブドウの木であふれている。ポルトガルは重要な毛織物製品製造国になる可能性がなかったため、その供給をイングランドに求めても、ポルトガルは損をすることは何もなかった。この条約は比較優位を得るために補完的な資産を、それぞれの国に持たせることを許したといえる。そしてそれゆえ、ポルトガルは毛織物をスペインにあまり依存しなくてもよくなり、一方、イングランドはフランスからワインをあまり輸入しなくてもよくなった。フランスとスペインはこの条約から被害を被り、メシュエン条約を非難し、ポルトガルはこの条約によって、イングランドの政治的・経済的奴隷になったと宣言した。

リスボンにおける非常に多くのイングランドとスコットランドの商人の存在と“**factory**”の参照を理解するために、1642年と1654年の条約、1661年の結婚条約（これは先立つ取り決めを確固とするもの）、そして1703年のメシュエン条約以来、ポルトガルの通商は実際的にはイングランドの支配下に入った。イングランド商人達はオポルトとリスボンで地位を確立し、ポルトガルに対して輸入された商品を受け取ったり、販売した。それらはポルトガルでの国内消費であるか、ブラジルへの再輸出のためであった。そしてこの目的のために、イングランドの商人達は建物を建てた。これらの建物は製品の販売と貯蔵のための倉庫や代理店(agents)として使われた。ある意味では、18世紀にポルトガルはイングランドの通商奴隷(commercial vassal)になった。そしてポルトガルの商人達は小売店主(shopkeeper)や小売商人(retail traders)以上の水準より上に上がることは稀だった。ポンバル(Pombal)が、貿易を土地の人々に返すこと、そして土地の人々が外国製品の輸入業者や卸売業者にすることによって変更したいと願ったことは、この通商上従属のこの状況であった。彼の努力は成功しなかった。factor と factory は agent と agency と同意義のものとして使われた。明らかに建物は、問屋や貯蔵場所であるのみならず、住居や娯楽の中心地としての役目を果たした。<sup>101</sup>

メシュエン条約はイングランドの国益を促進するために慎重に計算されたものであったと、長い間賞賛されてきた。しかし、この条約の条項によってイングランドを赤ワインを飲む国からポートワインを飲む国に変化させた。この条項ゆえに、潜在的に巨大であったかもしれない英仏貿易が妨げられたことが注目されるようになった。<sup>102</sup>

メシュエン条約のような条約が促進される背景には、重金主義者と重商主義者間の論争と、その後の英国金融政策の歴史的な変化（すなわち、1633年に金銀地金と外国貨幣の輸出の合法化の帰結）からの重金主義者の実質的滅亡があった。重商主義原理が勝利し、

貿易収支が国家繁栄の基準になった。その現実的な影響は深遠なものであった。英国のフランスとの貿易収支は好ましいものではないという理由で英仏間の交易を極端に縮小するという議論を強化した。結果としてではあるが、英国においてフランス産ワインの代わりに、ポートワインの消費が、貿易収支が英国にとって黒字であるポルトガルとのメシュエン条約によって促進された。19世紀まで、英国は自己の食料供給と自国の最大産業のための原材料を起こしたのであるが、銀行や信用機能が不完全であったので、外国貿易は貴金属のストックに追加を与えるものと頻繁に見なされていた。<sup>103</sup>

メシュエン条約の今日的意義は、多角的貿易協定よりも特惠貿易協定を好む政治家に対する非難である。スミスの議論は核心を突いている。<sup>104</sup> メシュエン条約は赤ワインの代わりにポートワインを150年間飲ませるように仕向けた。イングランドでの痛風やアルコール依存症を大きく増大させた。<sup>105</sup> ビスケー湾の荒海を通過する船路のためには、ブランデーをワインに加える必要があった。これによって、航海中のワイン劣化を減らすことができたのである。しかし、この結果、今日でさえも強くて芳醇でフルーティーなワインに対する選好が存続しているという。<sup>106</sup> リチャード・コブデンによると、イングランドは混ぜ物によって品質が落ちたワインという帰結に苦しんだという。<sup>107</sup> ただし、フランシス(2008)によると、ポートワインという用語は、1715年にオポルトから出荷されるワインに対して使われ始めた。しかし、すべてのポルトガル産ワインを対象として無差別的にまだ使われていたかもしれない。<sup>108</sup> どれが混ぜ物があり、どれが混ぜ物がないかは、品質表示がないかぎり、識別できなかったのではないかと。

さらにメシュエン条約によって喚起された貿易は、デイビッド・リカードが比較優位の理論を提示するために使われたが、その理論に不朽の名声を与えたことになった。<sup>109</sup>

## 6 英ポルトガル同盟のその後の長期的な効果

第二次世界大戦の数年前、サラザール政権はソビエト連邦を除く、全ての主要国と友好関係を育成してきた。1943年10月12日 第二次世界大戦中のポルトガルは中立国であったが、イギリスとの同盟に基づいてアゾレス諸島の基地を連合軍に租借した。イギリスはポルトガルの中立を保護することを固く誓って、英ポルトガル同盟はそのまま維持された。<sup>110</sup> 1943年10月12日、チャーチル首相は庶民院で、ポルトガル政府は1373年の英ポルトガル条約に基づき、商船をよりよく保護するために、アゾレス(Azores)諸島の海軍基地を英国に租借することに合意したことを報告した。<sup>111</sup>

実際のところ、ポルトガルは1373年の英ポルトガル条約に遡る英国の公的な同盟国であるが、第二次世界大戦における中立諸国の中でユニークな存在であった。ポルトガル政府は、そのような重大な時点において、それを追認することを控える願いはないことを主張したが、それは現在の緊急時における中立の地位を放棄するように、義務付けるものではないと主張した。この正直ではないが、巧みな二重表現(doublespeak)はポルトガル独裁者、サラザール政権が歩いて渡ることを決意している非常に危うい道を反映している。<sup>112</sup>

ポルトガルが阻止する力がなかった戦争行為の中でインド植民地を実際に失った。1961年にゴア (Goa) を取り巻く出来事は、ポルトガル本国のサラザール(Salazar)政権に、国民を戦争という目的のために一体化させるという国家的に悲惨な出来事を提供することによって、ポルトガルの立場を硬化させた。ポルトガル領インドは4,194平方キロメートルといった相対的に小さなものであったが、インド政府の染料は他の国家に対するあからさまな武力侵略行為であった。ポルトガルはそこにゴア、ダマン、ディーウといった3つの通商の飛び領土を持っていた。インド政府はそれを侮辱と考えて、1940年代後半には、これらの土地を取ると脅していた。イギリス首相ウィンストン・チャーチルは米国と共に、インドの野望を抑えるために強力に介入した。その後、ネルー首相は、アンゴラにおける武装反乱の勃発に煽られてポルトガルに対して有無を言わせない要求をした。サラザール政権はその領土を断念するつもりがないこと、そして交渉することを拒否したことが明らかになったとき、インドは3つの領土の国境に戦車や飛行機、戦艦によって支援された3万の兵士を結集させた。Vassalo e Silva 総督<sup>113</sup>は、空からの援護や防空手段なしに貧弱なわずかのおおよそ3,000人の兵士で領土を防衛することができたであろうか。12月11日、サラザール政権は、英ポルトガル条約を発動させることを試みた。グレートブリテンは、600年続いた同盟は明らかに限界がある。特にイギリス連邦の1員が関わっていると言って、1954年以来、援助することを拒んできた。ブリテンは、ブリテンの植民地に通過するためにポルトガルの港をもはや必要としていなかった。そして、ポルトガルは勢力の衰えた英海軍の保護をもはや必要としなかった。北大西洋条約機構(NATO)のような新しい同盟構造が、意図と実践の両方において、英ポルトガル条約に明らかに取って代わったのである。<sup>114</sup> そして、最終的に、これらの領土は1961年12月19日にインド共和国に併合された。

#### 参考文献

- Albala, Ken. *Food in Early Modern Europe*. Westport, CT: Greenwood Press. 2003. p.xi
- Anderson, James M. *Daily Life through Trade: Buying and Selling in World History*. Santa Barbara, CA.: Greenwood. 2013. p.133.
- Atiya Aziz S. *Crusade, Commerce, and Culture*. Bloomington, IN.: Indiana University Press. 1962. p.17.
- Baronov, David. *The Abolition of Slavery in Brazil: The "Liberation" of Africans through the Emancipation of Capital*. Westport, CT.: Greenwood Press. 2000. p.121.
- Barnes, Harry Elmer. *Sociology and Political Theory: A Consideration of the Sociological Basis of Politics*. New York: A.A. Knopf. 1924. p.188.
- Baronov, David. *The Abolition of Slavery in Brazil: The "Liberation" of Africans through the Emancipation of Capital*. Westport, CT.: Greenwood Press. 2000. p.122.
- Bastable, C.F. *The Commerce of Nations*. 8<sup>th</sup> ed. London: Methuen & Co. 1917. p.38.

Bernstein, Peter L. *The Power of Gold: The History of an Obsession*. New York: Wiley. Place of publication: . Publication year: 2000.

Birmingham, D. *A Concise History of Portugal*, 2<sup>nd</sup> ed. New York: Cambridge University Press. 2011.

Black, Jeremy. *A System of Ambition? British Foreign Policy 1660-1793*. New York: Longman. 1991.

Booth, Edward Townsend. *God Made the Country*. London: Cassell.1947. p.304.

Brown, Richard. *Society and Economy in Modern Britain, 1700-1850*. London: Routledge. Place of publication: . 1991. p.162.

Caldwell, R. (1942). "The Anglo-Portuguese Alliance Today,". *Foreign Affairs*, 21(1), 149-157.

Cann, John P. *Counterinsurgency in Africa: The Portuguese Way of War, 1961-1974*. Westport, CT: Greenwood Press. 1997. p.30.

Cannon, J.A. "Methuen Treaty," *The Oxford Companion to British History*. Oxford: Oxford University Press. 1997. p.108 ; 640.

Cavendish, Richard. "The Methuen Treaty: December 27th, 1703," *History Today*. History Today Ltd. Volume 53. Issue 12. December 2003. p.54.

Chapman, A. B. Wallis. "The Commercial Relations of England and Portugal, 1487-1807," *Transactions of the Royal Historical Society*, Third Series, Vol.1, 1907, pp.157-179.

Chalmers, George. *A Collection of Treaties between Great Britain and Other Powers*, vol.2. London. 1790.

Cobden, Richard. *The Political Writings of Richard Cobden*, with a Preface by Lord Welby, Introductions by Sir Louis Mallet, C.B., and William Cullen Bryant, Notes by F.W. Chesson and a Bibliography, vol. 1, London: T. Fisher Unwin, 1903.

The Columbia University Press. "Alfonso I (king of Portugal)," *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. The Columbia University Press. 2016.

The Columbia University Press. "Blake, Robert," *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. The Columbia University Press. 2016.

The Columbia University Press. "Catherine of Braganza," *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. The Columbia University Press. 2016.

The Columbia University Press. "Diniz," *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. : The Columbia University Press. 2016.

The Columbia University Press. John I (king of Portugal). *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. 2016.

The Columbia University Press. "John V (king of Portugal)," *The Columbia Encyclopedia*. 6th ed. Columbia University Press. 2014.

Columbia University Press. "Oporto," "Peter II (king of Portugal)," *The Columbia Encyclopedia*. 6th ed. Columbia University Press. 2014.

The Columbia University Press. "Sancho I (king of Portugal)," *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. 2016.

Conybear, John A.C. "Leadership by Example?: Britain and the Free Trade Movement of the Nineteen Century," *Going Alone The Case for Relaxed Reciprocity in Freeing Trade*. edited by Bhagwati, j. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press. 2002.p.44.

Cowdrey, H.E.J. "Pope Urban II's Preaching of the First Crusade," *History*, VI.55, No.184(1970), Wiley. pp.177-188.

Cunha, Carlos A. and Cunha, Rhonda. *Culture and Customs of Portugal*. Santa Barbara, CA.: Greenwood. : 2010. p.70.

Cypher, James M. and Dietz, James L. *The Process of Economic Development*. London: Routledge. 1997. Page number: 120

Davenant, Charles. *An account of the trade between Great-Britain, France, Holland, Spain, Portugal, Italy, Africa, Newfoundland, &c. with the importations and exportations of all commodities, particularly of the woollen manufactures : deliver'd in two reports made to the Commissioners for Publick Accounts* . London: Printed for A. Bell, W. Taylor and J. Baker. 1984.

David, Charles Wendell. -*De Expugnatione Lyxbonensi =: The Conquest of Lisbon*. New York: Columbia University Press. 2001. p.17.

Decker, Sir Matthew. *An essay on the causes of the decline of the foreign trade consequently of the value of the lands of Britain, and on the means to restore both. Begun in the year 1739*. London: printed for J. Brotherton at the Bible in Cornbill. 1744.

Dewitt, John. *Early Globalization and the Economic Development of the United States and Brazil*. Westport, CT.: Praeger. 2002. p. 3.

Dijkstra, Henk *History of the Ancient and Medieval World*. Volume: 9. New York: Marshall Cavendish. 1996. p.1273.

Evening Chronicle, "Test Your No'l-Edge Here!" *Evening Chronicle* (Newcastle, England). December 19, 2006. p.22.

Fallon, Robert Thomas. *Milton in Government*. University Park, PA.: Pennsylvania State University Press. 1993. p.46.

Fay, C. R. *Great Britain from Adam Smith to the Present Day:An Economic and Social Survey*. London: Longmans, Green and Co. 1928. p.140.

Fay, C. R. *Adam Smith and the Scotland of His Day*. Cambridge, England: University Press. 1956. p. 100.



- Ferro, Marc. *Colonization: A Global History*. London: Routledge. 1997. Page iii.
- de Figueiredo, Antonio “Nkrumah and the Forgotten Anglo-Portuguese Alliance.,” *New African*. Issue: 448. February 2006. IC Publications Ltd.
- Fisher, H. E. S. “Anglo-Portuguese Trade, 1700-1770,” *The Economic History Review*, New Series, Vol. 16, No. 2 (1963), pp. 219-233.
- Findlay, Ronald. and O'Rourke, Kevin H. *Power and Plenty: Trade, War, and the World Economy in the Second Millennium*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 2007. p.252.
- Francis, A.D. “John Methuen and the Anglo-Portuguese Treaties of 1703,” *The Historical Journal*. vol.III. No.2. 1960.
- Francis, A.D. *The Methuens and Portugal 1691-1708*. Cambridge: Cambridge University Press. 1966.
- Francis, A.D. *The Methuens and Portugal*. New York: Cambridge University Press. 2008.
- Frank, Andre Gunder. *World Accumulation, 1492-1789*. New York: Algora. 1978. p.76.
- Frey, Linda and Frey, Marsha *The Treaties of the War of the Spanish Succession: An Historical and Critical Dictionary*. Westport, CT: Greenwood Press. 1995. p.287.
- Gordon, Kendall, “Portugal Offers a Stunning Vintage,” *The Roanoke Times* (Roanoke, VA). January 29, 2014. p.E1
- Gibb, H.A.R. “English Crusaders in Portugal,” edited by Prestage, E. *Chapters in Anglo-Portuguese Relations*. Westport, CT: Greenwood Press. 1971.
- Alastair Hamilton Alexander H. De Groot and Maurits H. Van Den Boogert. *Friends and Rivals in the East: Studies in Anglo-Dutch Relations in the Levant from the Seventeenth to the Early Nineteenth Century*. Boston: Brill. 2000. p.116
- Harrod, Jeffrey. “Global Realism: Unmasking power in the International Political Economy,” *Critical Theory and World Politics*. edited by Jones, Richard Wyn. Boulder, CO : Lynne Rienner. 2001. p.115.
- Heinowitz, Rebecca *Cole British Romanticism and Spanish America, 1777-1825: Rewriting Conquest*. Edinburgh: Edinburgh University Press. 2009. p.25.
- Henry, Jeffreys. “First of the Fizz,” *The Spectator*. September 21, 2013.
- Hurlbert, William Henry. “Reciprocity and Canada,” *The North American Review*, Vol. 153, No. 419 (Oct., 1891), pp. 468-480.
- John, Ramsay McCulloch. *A Dictionary, Practical, Theoretical and Historical of Commerce and Commercial Navigation*, 1832.
- Johnson, E. A. J. *Predecessors of Adam Smith: The Growth of British Economic Thought*. New York: Prentice Hall. 1937. p.145.

- Keefe, Eugene K., Coffin, David P. et al. *Area Handbook for Portugal*. Washington, DC. : U.S. Government Printing Office. 1977. p.54.
- Keen, Benjamin. *Readings in Latin-American Civilization:1492 to the Present*. Boston: Houghton Mifflin. 1955. p.180.
- Kenney, Martin. And Florida, Richard. *Locating Global Advantage: Industry Dynamics in the International Economy*. Stanford, CA: Stanford University Press. 2004. Page number: xvi
- Kindleberger, Charles P. *World Economic Primacy, 1500 to 1990*. New York: Oxford University Press. 1996. p.42.
- Knight, Melvin M. Barnes, Harry Elmer. and Fleugel, Felix. *Economic History of Europe in Modern Times*. Boston: Houghton Mifflin Company. 1928.
- Lefebvre, Georges. *The French Revolution: From Its Origins to 1793*. translated by Evanson, Elizabeth Moss. London: Routledge. 2001. p.31.
- Levi, Leone. *History of British commerce and of the economic progress of the British Nation, 1763-1870*. London: John Murray 1872.
- Lipson, E. *The Economic History of England. vol. III:The Age of Mercantilism* sixth edition. London: Adam and Charles Black. pp.112-114.
- Lipson, E. *The Growth of English Society A Short Economic History*. London: Adam and Charles Black. p.155.
- List, Friedrich. *National system of political economy*. Translated from the German by G. A. Matile. including the notes of the French translation, by Henri Richelot ... with a preliminary essay and notes, by Stephen Colwell. by Philadelphia: J.B. Lippincott & co. 1856.
- Livermore, H. V. *A History of Portugal*. Cambridge, England: Cambridge University Press. 1947. p.326.
- Livermore, H.V. *A New History of Portugal*. Cambridge, England: Cambridge University Press. 1966.
- McLean, Iain. *Adam Smith: Radical and Egalitarian : An Interpretation for the 21st Century*. Edinburgh: Edinburgh University Press. 2006. p.73
- Marriott, J. A. R. *The European Commonwealth:Problems Historical and Diplomatic*. Oxford: The Clarendon Press. 1918. p.150
- Mead, William Edward. *The Grand Tour in the Eighteenth Century*. Boston: Houghton Mifflin Company. 1914. p.28.
- Moon, Bruce E. *Dilemmas of International Trade*. Boulder, CO.: Westview Press. 2000. p.237
- Nazzari, Muriel. *Disappearance of the Dowry:Women, Families, and Social Change in*

*Sao Paulo, Brazil (1600-1900)*. Stanford, CA: Stanford University Press. 1991. p.149

Needler, Martin C. *The Problem of Democracy in Latin America*. Lexington, MA: Lexington Books. 1987. p.150.

Normano, J. F. *Brazil: A Study of Economic Types*. Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press. 1935. p.151.

Nowell, Charles E. *A History of Portugal*. New York: D. Van Nostrand. 1952. p.160.

Nye, John V.C. *War, Wine, and Taxes The Political Economy of Anglo-French Trade, 1689-1900*. Princeton and Oxford: Princeton University Press. 2007. pp.25,27.

O'Callaghan, Joseph F. *A History of Medieval Spain*. Ithaca, NY: Cornell University Press. 1975. p.243,458

O'Callaghan, Joseph F. *Reconquest and Crusade in Medieval Spain*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 2004. p.76.

Olson, James S. Shadle, Robert. Marlay, Ross. Ratliff, William G. and Rowe Jr. Joseph M. *Historical Dictionary of European Imperialism*. New York: Greenwood Press. 1991. p.619.

Olson, James S. Slick, Sam L. Freeman, Samuel. Burnett, Virginia Garrard. and Koestler, Fred. *Historical Dictionary of the Spanish Empire, 1402-1975*. New York: Greenwood Press. 1992. p. 401.

Pearce, Mary et al. "Our Ancient Ally; Answers to Correspondents," *Daily Mail* (London).July 2, 2001. p.53.

Pomfret, Richard. *The Economics of Regional Trading Arrangements*. Oxford: Clarendon Press. 1997. p.17.

Prestage, Edgar. *The Portuguese Pioneers*. London: A. & C. Black. 1933. p.3.

Prestage, Edgar. "The Anglo-Portuguese Alliance," *Transactions of the Royal Historical Society* Vol. 17 (1934), Cambridge University Press on behalf of the Royal Historical Society. pp. 69-100

Ramsay, G. D. *English Overseas Trade during the Centuries of Emergence:Studies in Some Modern Origins of the English-Speaking World*. London: MacMillan.1957.

Redding, Cyrus. *A history and description of modern wine*. 3d ed. with additions and corrections. London: H. G. Bohn. 1851.

Richard, Cavendish, "The Methuen Treaty: December 27th, 1703," *History Today*. Volume: 53. Issue: 12 December 2003. p.54.

Robson, Peter. *The Economics of International Integration*. London: Routledge. 1988.

Ross, Mary. "Port Enjoys Worldwide Market," *Daily Herald* (Arlington Heights, IL). November 29, 2006. p.4.

Sadlier, Darlene J. *Brazil Imagined: 1500 To the Present*. Austin, TX: University of

Texas Press. 2008. p.93.

Savage, Helen. "Port and Starboard Shippers; WINE," *The Journal* (Newcastle, England). December 16, 2011. p.41.

Schneider, Ronald M. *Brazil: Culture and Politics in a New Industrial Powerhouse*. Boulder, CO: Westview Press. 1996. p.205.

Sellers, Charles. *Oporto, old and new : being a historical record of the port wine trade, and a tribute to British commercial enterprize in the north of Portugal* London : H.E. Harper (The wine & spirit gazette). 1899.

Shaw, L.M.E. *The Anglo-Portuguese Alliance and the English Merchants in Portugal 1654-1810*. Hants: Ashgate Publishing Limited. 1998.

Simon, Andre L. *The History of the wine trade in England*. Vol. II. London: Wyman & Sons, Ltd. 1907.

Simon, Andre L. *Wine and the wine trade*. London: Sir Issac Pitman & Sons, Ltd. 1921.

Simpson, James. *Creating Wine: The Emergence of a World Industry, 1840-1914*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 2011. p.iii; 83.

Smith, Adam. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. edited by Bullock, C. J. New York: P. F. Collier & Son. 1909. p. 364,661.

Stephen, Whatley. *A General Collection of Treatys of Peace and Commerce, Renunciations, Manifestos, and other Publick Papers, from the Year 1642, to the End of the Reign of Queen Anne*. Vol.III. London : Printed for J. J. and P. Knapton, J. Darby, D. Midwinter and 11 others. 1732.

Rose, J. Holland Newton, A. P. and Benians, E. A. *The Cambridge History of the British Empire*. New York: Macmillan Company. 1929. p.230.

Royal Institute of International Affairs. *Chronology and Index of the Second World War 1938-1945*. Westport, CT.: Meckler. 1990. p.214.

Shaw, L.M.E. *The Anglo-Portuguese Alliance and the English Merchants in Portugal, 1654-1810*. United Kingdom: Ashgate Publishing Limited. p.5.

Stern, Jacques. *The French Colonies: Past and Future*. New York: Didier. 1944. p.36.

Sumner, William Graham. *Folkways: A Study of the Sociological Importance of Usages, Manners, Customs, Mores, and Morals*. Boston: Ginn. 1906. p.478.

Thackeray, Frank W. Findling, John E. *Events That Changed the World through the Sixteenth Century*. Westport, CT.: Greenwood Press. 2001. p.8

Thompson, James Westfall. *Economic and Social History of Europe in the Later Middle Ages (1300-1530)*. New York: Century. 1931. p.348.

Ungewitter, F. H. *Europe, its past and present condition being a comprehensive manual of European geography and history*. New York: A.S. Barnes & co. 1854.

Unwin, Tim. *Wine and the Vine: An Historical Geography of Viticulture and the Wine Trade*. London: Routledge. 1996. p.3

Usher, Abbott Payson *An Introduction to the Industrial History of England*. New York: Houghton Mifflin Company. 1920.

Victoria, Moore. "Don't Pass the Port - Linger at Least for a Weekend. Oporto, Portugal's second City, is a First-Rate Choice for a Weekend Break," *Daily Mail* (London). April 19, 2003. p.60.

Viton, Albert. *Great Britain, an Empire in Transition*. New York: The John Day Company. 1940.

Wagley, Charles. *An Introduction to Brazil*. New York: Columbia University Press. 1963. p.53.

Walpole, Spencer. *Foreign Relations*. New York: Macmillan and Co. 1882. p.149.

Ward, A. W. Prothero, G. W. and Leathes, Stanley *The Cambridge Modern History*. Vol. 5. Cambridge: University Press. 1908. p.105.

The Washington Times. "A European City Spared in War," Washington, DC.; The Washington Times. January 19, 2012. p.B04.

Way, Ruth. and Simmons, Margaret. *A Geography of Spain and Portugal*. London: Methuen. 1962. pp. 92-93; 319.

Western Mail, "The Changing Methods of Storing Wine," *Western Mail* (Cardiff, Wales). November 1, 2003. p.28.

William, Sir Foster. *England's Quest of Eastern Trade*. London: A. & C. Black. 1933. p.330.

Williamson, James A. *A Short History of British Expansion*. New York: Macmillan. 1931. p.336.

---

<sup>1</sup> House of Commons Debate, 12 October, 1943, vol. 392 cc716-19, <http://hansard.millbanksystems.com/commons/1943/oct/12/agreement-with-Portugal> (2017年9月10日アクセス)

<sup>2</sup> de Figueiredo,

<sup>3</sup> キャサリン・オブ・ブラガンザ (Catherine of Braganza) はイングランド王チャールズ2世の王妃。イングランド王チャールズ二世の〔国王の妻としての〕女王(queen consort)である。〔国王としての〕女王は queen regnant という。

<sup>4</sup> "Crusades," *The Columbia Encyclopedia*,

<sup>5</sup> Gibb, p.1.

<sup>6</sup> Atiya, p.17.

<sup>7</sup> シャルトルのフルシェールとは僧侶 priest で、第一回目の十字軍に参加し、ラテン語で十字軍の年代記を書いた。

<sup>8</sup> オヴェルニュ、オーヴェルニュ地域圏 (仏: Auvergne) は、フランスの中南部、中央山塊に位置するかつて存在した地域圏である。

- 
- 9 フランスの中央高地に位置する都市の一つ。
- 10 Alfonso I, 1109?-1185, first king of Portugal, son of Henry of Burgundy. いわゆるリスボン攻防戦 (Siege of Lisbon) ; Prestage(1933), pp.69-70; David, p.17.
- 11 Dijkstra, p.1273.
- 12 O'Callaghan(2004), p.76.
- 13 Prestage, p.3.
- 14 マラベージェ金貨とはイスラム時代のスペインおよびモロッコでムーア人が発行したディナール(dinar)金貨に対するヨーロッパ人による呼称
- 15 O'Callaghan(2004), p.58-9.
- 16 O'Callaghan(1975), p.243. カリフとは a successor of Muhammad as temporal and spiritual head of Islam used as a title ; Livermore(1947) , pp.94-95 にシルヴェス侵攻の詳細が描かれている。
- 17 Gibb, p.22,
- 18 フェランはポルトガル王サンシュ 1 世の四男。
- 19 Livermore, p.103-4.
- 20 Shaw, p.6.
- 21 第 41 条：すべての商人は、古来の正当な慣習に合致して、全ての違法な強制取り立てを被ることなく、貿易のため、水陸を問わず、安全かつ無事にイングランドに出入国し、イングランドに滞在し、通行することができる。しかしながら、イングランドと戦争中である国からの商人には、戦争時において、これは適用されない。イングランドと戦争中の国において、イングランド自身の商人がいかに取り扱われているかがイングランドの裁判長によって見い出されるまで、戦争勃発時にイングランドにいたそのような商人は、身体や財産に損傷を受けることなく、拘束されるであろう。もしイングランドの商人が安全であるなら、かれらも安全である。
- (41) All merchants may enter or leave England unharmed and without fear, and may stay or travel within it, by land or water, for purposes of trade, free from all illegal exactions, in accordance with ancient and lawful customs. This, however, does not apply in time of war to merchants from a country that is at war with us. Any such merchants found in our country at the outbreak of war shall be detained without injury to their persons or property, until we or our chief justice have discovered how our own merchants are being treated in the country at war with us. If our own merchants are safe they shall be safe too.
- <https://www.bl.uk/magna-carta/articles/magna-carta-english-translation>  
(2017.7.21 access)
- 22 レコンキスタ(Reconquista)とは、ムスリム勢力によって 8 世紀初頭に征服されたイベリア半島の領土を取り返すイベリア半島のキリスト教徒による国土回復運動を叙述するために使われる用語である。当時はイスラムの拡大が目覚ましく、アラブ帝国の創設があった。: Thackeray, p.8. ムーア人とは 3~16 世紀にスペインを征服したイスラム教徒。
- 23 Anderson, p133.
- 24 "Diniz," The Columbia University Press.
- 25 Anderson, p133.
- 26 Anderson, p134.
- 27 Chapman, Wallis. and Shillinton, V.M. p.4-5.
- 28 Anderson, p134.
- 29 Chapman, Wallis. and Shillinton, V.M. p.6.
- 30 Chapman, Wallis. and Shillinton, V.M. p.8.
- 31 O'Callaghan, p.482; Anderson, p.134.
- 32 Stephen, pp.97-111.
- 33 Chalmers, G. pp.267-286.
- 34 Shaw, p.5.

- 
- 35 ブレイクについては Cannon, p.108.を参照すること。
- 36 Fallon, p.46.
- 37 Fallon, p.46.
- 38 Livermore, p.296-7 .
- 39 Livermore,p.326.
- 40 Keen,p.180.
- 41 William, p.330.
- 42 Baronov, p.121.
- 43 Caldwell. p.139.
- 44 Columbia University Press, “Peter II (king of Portugal),”
- 45 Cannon, J.A. p.640; Marriott.p.150.
- 46 Columbia University Press, “Catherine of Braganza,”
- 47 Frey et al. p.287.
- 48 Columbia University Press, “John V(King of Portugal),”
- 49 Chapman, p.160.
- 50 Richard, p.54.
- 51 Victoria, p.60.
- 52 Savage,p.41.
- 53 もちろんフランス産ワインのイングランドへの密輸があったことは否定できないだろう。Western Mail,p.28; Richard,p.54.
- 54 Gordon,p.E1.
- 55 Ross,p.4.
- 56 Western Mail, p.28.
- 57 Olson et al. (1992). pp.400-1, Olson et al. (1991). pp.619-620,
- 58 1703 年 5 月の条約は次の文献を参照すること。Stephen, pp.354-362.
- 59 Livermore,p.327.
- 60 Livermore,p.328.
- 61 Livermore,p.328.
- 62 Pomfret, p.17.
- 63 Wagley,p.53
- 64 Bastable pp.37-8
- 65 Knight, p.319.
- 66 Richard,p.54.
- 67 Usher, pp.282-3.
- 68 Kenney,p.xvi.
- 69 Williamson, p.336.
- 70 Walpole, pp.151-152.
- 71 Cypher,p.120.
- 72 Frank, p.104.
- 73 Frank, p.108.
- 74 Sadlier,p.93.
- 75 Wagley, p.53.
- 76 Normano, p.151.
- 77 Bernstein, p.109.
- 78 Ferro, p.58.
- 79 Nazzari,p.149.
- 80 Stern, p.36.
- 81 Way et al. pp.92-93.
- 82 Ungewitter,p.64
- 83 Needler, p.150.
- 84 Sadlier,p.106.

- 
- 85 Heinowitz, p.25. 武力又は経済的従属による1国の征服は基本的には違いがなく、経済的征服は通常、最終的に政治的隷属を導く。その例がメシエン条約以来のポルトガルであるという見解がある。Barnes, p.188. メシエン条約以来、ポルトガルは実質的に英国の植民地であったと考えられた。Evanson, p.31. 英国重商主義制度の縁辺的な地位をこの条約によってポルトガルは受け入れた。Schneider, p.205.
- 86 Columbia University Press, “John V(King of Portugal),”
- 87 Mead, p.28.
- 88 Booth,p.304.
- 89 Albala, p.xi; p.81.
- 90 Cannon, J.A. p.640.
- 91 Simon(1921), p.55.
- 92 Porto in Portuguese, and Oporto in English.: Unwin, pp.262.
- 93 Unwin, pp.262.
- 94 Nye, p.25.
- 95 Conybear,p.44.
- 96 Moon, p.237. Lipson, *The Growth of English Society*, p. 155.
- 97 Smith, p.661.
- 98 McLean,p.125.
- 99 Fay, p.100.
- 100 この節の記述は Nowell,p.160 に依存している。
- 101 Schaw, Janet. and Andrews, *Evangeline Walker*, p.244.
- 102 この条約が創り出す貿易転換効果で非難された。Robson,p.8.
- 103 Lipson(1949), p.155.
- 104 Mclean, p.73.
- 105 Sumner, p.478.
- 106 *Evening Chronicle*, p.22.
- 107 Cobden(1835), p.42.
- 108 Francis(2008), pp.217-8.
- 109 Findley, p.252.
- 110 Keefe, Eugene K., Coffin, David P. et al.
- 111 *Royal Institute of International Affairs*, p.214.
- 112 *The Washington Times*. “A European City Spared in War,” January 19, 2012. P.B04.
- 113 ポルトガル領インドの最後の総督。
- 114 Cann, p.30.